聖魔戦記外伝２　隻腕の騎士

金城　ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖魔戦記外伝２　隻腕の騎士

【Ｎコード】

Ｎ０７７０Ｄ

【作者名】

金城　ユウ

【あらすじ】

兄に命を狙われる青年は、魔族の隠里で少女とガイア教の女神官に出会う。聖魔戦記外伝シリーズ第２弾。※ストーリー的に本編（聖魔戦記前奏曲）とは独立しています。本編を読んで外伝よりは外伝を読んで本編を読むという方が楽しめるかも。本編はまだ４部までしか更新していませんけど（汗

op01：兄と弟

「死ね！」

ファン教の聖騎士の鎧を着た男の大槍が黒衣の若者を襲う。若者は間一髪、その攻撃を避けるとあわてて間合いを取る。森の中のため充分に離れることは出来なかったが、攻撃を避けるには充分な距離だ。

「ウッド兄さん、やめてくれ」

「私を兄と呼ぶな！　お前が魔族だったとは……　このことが世間に知れれば、我がハス家は終わりだ。魔族の女に手を出すとは親父も馬鹿な事をしてくれる」

聖騎士が吐き捨てるように言う。

「兄さん……」

腹違いで兄弟仲もよかったというわけではなかったが、剣の稽古や騎士としての立ち振る舞いを教えてくれた兄だった。その兄に向けて、黒衣の若者は剣を抜くことを躊躇した。

「親父の日記を読んだ時には驚いたが、私は家を守らねばならない。魔族としてではなく、病死ということにしてやる。家のために死ねジェニス！」

ジェニスは、その一撃を剣の平で受け止めた。

「やめてくれ兄さん。そんなに俺が邪魔なら家を捨ててもいい」

「生き残りたかったら俺を倒していけ。俺はお前を殺して後顧（こうこ）の憂（うれ）いを絶つ！」

ウッドの持つ大槍『バハムート』の一撃に、攻撃を受け止めたジェニスの剣が澄んだ音を立てて切断される。

ジェニスは迷わず背中を向けて逃げ出した、兄の強さは充分すぎるほど把握している。

『灼眼（しゃくがん）の鬼人』と呼ばれるほどの人だ。実際、邪教徒征伐の時に

は女子供すら躊躇(ちゅうちょ)なく斬る人だ。
どのくらい走っただろうか。森が開ける。その先につり橋があったはずだ。それを落としてしまえば、いくらかの時間が稼げるはずだ。
しかし、つり橋は無かった。すでに落とされていたのだ。他の誰かが落としたのか、兄が逃げ場を限定する意味で落としたのか。目的のためなら手段を選ばない兄だ、それぐらいはやるだろう。
「ファンの法典。やぶりし者に死の裁きを。ルールブック」
ウッドの声と共に、光に包まれた法典が四方に現れた。そして、奉天から射出された閃光と共にジェニスの服が切り裂かれ鮮血に染まる。
『ルールブック』ファン教独自の魔法。四方に現れた法典から目標の息の根が止まるまで光の刃が降り注ぐという魔法。通常手段ではこの魔法から逃れることは出来ない。と言われている。
ジェニスは身体を丸め急所に攻撃を受けないようにするだけで精一杯だ。
「ジェニス。今、楽にしてやる」
ウッドが大槍ハムートを構える。そして……
「双竜撃！」
強烈な一撃がジェニスを襲う。その強烈な一撃を避けようとした為、大槍はジェニスの左腕に当たる。ジェニスはそのまま弾き飛ばされ魔法(ルールブック)の効果範囲から抜け出ることが出来たが、谷底の川に向かい落ちていく。その場には折れた剣の柄と肘から切断された左腕が残される。
谷底に落ちていくジェニスを確認したウッドは、舌打ちするとジェニスの死を確認する為に川下へ歩き出した。

ｏＰ０１：兄と弟（後書き）

いきなりピンチのジェニス君。
灼眼の鬼人と呼ばれる兄の魔の手から、逃れることが出きるのでしょうか。

外伝１は、１日で更新しましたが、外伝２はゆっくり更新する予定です。（出来れば毎日更新したいのですけど、どうなりますか）
本日は、もう１話更新します。

ｏＰ０２：魔族の娘とガイア教の女神官

滝のそばに全裸の娘が腰まで水につかり立っている。金髪の髪を滴り落ちた水が豊かな胸あいだを流れ、キュッとくびれたウエストに向かい流れ落ちていく。

年の頃は、１４，５歳だろう。丸いとんぼメガネがただでさえ童顔の顔を幼く見せているが、華奢なわりに豊かな胸がアンバランスな魅力を醸し出している。

娘は水面に仰向けに倒れると空を見上げた。こうして青い空を見上げていると、嫌なことも忘れられるような気がした。

今の時間は女性が水浴びをする時間で、男性は近づかないきまりだが娘以外に人影は見えなかった。流行り病で村中が臥せっているのだから仕方は無いが、２日前に村を訪れたガイア教の神官が治療を施してくれたおかげで皆回復に向かっている。

娘の住む村は『魔族』と呼ばれる人々が集まった隠れ里だ。

幼い頃から人族は敵だと教えられてきた。ガイア教の神官に対して最初は敵意しか見せなかった村人も、神聖魔法と高価な薬を惜しげもなく使い献身的に看護をする神官を見て、若者達を中心に積極的に手伝いをする者が出てきた。娘もその１人なのだが「少し休んで、水浴びでもしてらっしゃい」と追い出されてしまった。

その神官はそうやって手伝いの者に休みをくれる反面、本人は不眠不休で村人の治療に当たっている。

ドボン！

考え事をしていた娘の耳に、何か大きなものが水中に投げ入れられたような音が届く。

すばやく起き上がり周囲を見渡すが、とくに変わった様子は無い。滝の上にも人影ひとつ無い。木材か岩でも落ちたのであろうか？まさか、熊ということはないだろうが可能性は捨てられない。

娘は意を決して滝壷に向かい潜る。そして、深緑色の瞳に映った

のは人間だった。

「熱も下がったようね。もう大丈夫」
幼子の額から手を放しながら蒼い神官服の女性が微笑む。子供の両親も臥せっているが、起き上がり神官の手を取って礼を言う。
「この子の生きようとする力が強かったからよ。私はほんの少しだけ手伝っただけ」
神官は手伝いを買って出てくれた若者に看病を任せ、家の外に出た。
家の入り口に面した広場では、若者たちがいくつもの大鍋にお湯を沸かしている。
「フェンリア様。お湯はこれだけあれば足りますか？」
若者達のリーダー格の青年が声を掛けてきた。
「まだまだね。どんどん沸かして頂戴。それか、生水は飲まずに、一度沸かした水を飲むこと。食器やコップも煮沸してから使うこと。病人の衣服や身体を拭いたものは一ヶ所にまとめておくこと。手洗いやうがいはこまめにすること。皆に徹底させて頂戴」
そして、青年の顔を覗き込み意味ありげな笑みを浮かべる。
「そういった訳で、お湯はいくらあっても困らないわ」
青年のなんともいえない表情を見て、フェンリアはおかしそうに笑いながら言った。
「休憩はちゃんといれてね。疲労がたまると病気が移りやすくなるから」
「フェンリア様！」
丸いトンボメガネをした娘がフェンリアの名前を叫びながら走ってくる。確かミレイという娘だ。よほど急いでいたのだろう、塗れた素肌の上に服を羽織っただけの格好だ。ボタンを留めていないシャツから豊かな胸が飛び出しそうになっている。

フェンリアは話をしていた青年の顔を両手ではさんで、クイッとミレイと反対方向に向けた。
「フェンリア様。た、大変なんです。滝から、人が落ちてきて、ひ、ひどい怪我を、滝　壷から引き上げて、それで、それで……」
「ミレイ。ちょっと落ち着いて、まずは服を直しましょう」
フェンリアはミレイの服を直してやる。
「それで、何があったの？」
少し落ち着いたミレイが、フェンリアに滝での出来事を話し始める。
「わかった。案内して。それから何人かついてきなさい」
ミレイから話を聞いたフェンリアは、若者たちに声をかけた。

ｏＰＯ２：魔族の娘とガイア教の女神官（後書き）

ミレイちゃん。いきなり読者サービスです（笑

（　゜∀　゜）彡　おっぱい！おっぱい！

　　⊂彡

　　|　　∩

というほどでもないですけど。

この後は、シリアスに物語が進んでいく（はず……）予定です。

ｏｐ０３：ジェニスとフェンリア

「うっ……」
体が重い。意識を取り戻したジェニスは、身体を起こそうとした。左腕をついて起き上がろうとしたのだが肘から先がなかった。そこで、兄の奥義である双竜撃を喰らったのを思い出した。以前、兄の双竜撃が岩を粉々に切り裂くのを見たことがある。あれではどんな重装甲の鎧でも意味は無い。腕１本で済んだのは奇跡としか言いようが無い。
「気がついた？」
ダークブラウンの髪をした神官がジェニスに声をかけた。胸に世界樹のホーリーシンボルをぶら下げている。ガイア教の神官だ。
「血が足りていないから、余り動かない方がいいわよ。あ、私はフェンリア＝ヒルデガルド。ガイア教の宣教師。神官戦士でもあるわ」
「ジェニス。ジェニス＝ハスだ。貴女か助けてくれたのか？」
フェンリアは首を横に振り、ジェニスのすぐ横を指さした。そこには、ジェニスの寝ているベッドに力尽きたようにもたれかかって眠る丸いトンボメガネをした娘がいた。
「その娘が滝壷に沈んでいた貴方を見つけて引き上げたの。命の恩人なんだから起きたら礼を言ってあげて」
フェンリアは寝ている娘に毛布をかけながら言った。
「傷はすべて塞いだけど、左腕はどうしようもないわ。それから、貴方も魔族ね。すまないと思ったけど寝ている間に魔法でスキャンさせてもらったわ。能力は魔力の力への変換。能力は使っていくうちに力加減がわかってくるでしょう。魔法をマスターできたら隻腕の魔法戦士としてやっていけるわよ」
その言葉を聞いて、ジェニスは自嘲気味に笑う。
「隻腕でも……　言いにくい事を、はっきり言いますね」

「ええ、どのように言っても現実は変わらないもの。貴方がこれからどのように生きるにしろ、他人である私には何の責任も取れないし、取る必要も無い。自分の人生は自分で責任取らなきゃ。それに、その娘もこの村の人たちも魔族よ。その事で自分は不幸です。なんて顔したら考え改めるまでぶん殴ってやるから」

とんでもない事を、さらりと言うフェンリア。

「貴女。本当に神官ですか？　でも下手な慰めよりはいいですね。体力が戻るまで今後の身のふり方でも考えますよ。殴られるのは御免ですから」

フェンリアがニコリと笑った。夏の太陽のようなスカッとした笑顔だ。

「よろしい。それじゃ大人しく寝ていなさい。夕食は運んできてあげるから。それから村中、伝染病が流行っているから、体力が戻るまでこの家から出ないこと。いいわね？」

フェンリアは念を押すとミレイの家を出た。正直、ジェニスだけにかまっているわけにはいかないのだ。

ほとんどの者が回復に向かっているとはいえ、まだ予断を許さない者もいる。

「今日も徹夜かしら……」

お肌によくないのよね。等と考えながらフェンリアは、村の広場に向かい歩き出した。

ｏＰＯ３：ジェニスとフェンリア（後書き）

「推して参る！」という感じの勢いのフェンリアです。単に推参と書くよりも、こう書くと何かぶち壊しそうな感じがするから素敵（笑この娘は、私の中ではいつもこのノリなんですよ。書いてて結構楽しい娘です。

次回はジェニスとミレイのお話になります。

op04：ジェニスとミレイ

身のふり方を考えるといっても何も考え付かなかった。自分の母が魔族であることも今日、初めて聞かされた。

そして、先ほどあの女神官は自分のことを魔族と呼んだ。その言葉に侮蔑や嫌悪が無いのはガイア教の教えからなのだろう。ガイア教は生物のすべては平等というのが一番の教義だ。

ファン教だと人間至上主義というか、魔族と教団の認定した邪教には決して容赦しない。聖騎士団などという小国の軍隊に匹敵する騎士団を保有しており。時には、各国に騎士団を派遣することもある。

「俺は、どうしたらいいのかな……」

呟いてみるが、それで問題が解決するわけではない。ジェニスは右手でその炎のような紅い髪を引っ掻き回した。

ミレイは暗闇の中に立っていた。しばらく、見ることの無かった悪夢……　おそらく、何人かの病死に立ち会ったせいだろう。夢とわかっていても、つらい事にはかわりない。

目を凝らすと、少し離れた場所に両親と弟が立っている。3年前に流行り病で亡くなった時の姿で……

「？！」

ミレイは両親たちを呼ぼうとしたが声が出なかった。それだけではなく、指一つ動かせない。金縛りにあったように。

しばらく、そうやって見つめ合ったあと両親と弟が少しずつ離れていく。どこかにいってしまう。

ミレイは両親と弟の名前を心の中で叫んだ。その深緑色の瞳から

涙が零れ落ちた。

「ミレイ、ミレイさん」
ミレイが、名前を呼ばれて目を覚ますと、炎のような紅い髪の青年が肩をゆすっていた。心配げに見つめる灼眼にミレイの顔が映っている。
「大丈夫ですか？　ずいぶんとうなされていましたが……」
「あ、ご、ごめんなさい。私、寝ちゃったみたいで……　あ、あの、私、何か言いました？」
ジェニスは、微笑んで言った。
「いいえ、意味のあることはなにも……　私の名前は、ジェニス＝ハス。あなたが助けてくれたそうですね。ありがとうございます」
ミレイは両手を、パタパタと振る。
「い、いえ。私はなにも……　怪我の手当ても、フェンリア様がすべてやられましたし。私は見ているだけしか……」
「でも、あなたが見つけてくれなければ、私は死んでいたでしょう。それならばあなたは命の恩人です」
「……」
ミレイは俯いたまま、言葉を発しない。
「ミレイさん？　何か不愉快だったでしょうか？」
ミレイが弾かれたように顔を上げた。
「いいえ、違います。私みたいのが命の恩人なんて……　私は何もできないのに」
ジャニスは右手でミレイの頬に触れた。
「そんなふうに自分を卑下する事は止めましょう。貴女が、私を見つけてくれた事は事実です。そのおかげで、私の命が助かったのも事実です。そして、僕は貴女のような女性（ひと）とも出会えた。私はとてもついていると思います」

ミレイの頬に朱が差す。
「あ、あの、わ、私、夕食貰ってきます」
ミレイは顔を隠すようにして家の外に出た。そして扉にもたれかかり、早鐘のように打つ心臓が落ち着くのを待つ。
「嘘よ。私なんて……」
ミレイは消えそうな声で呟いた。

ｏＰ０４：ジェニスとミレイ（後書き）

お待たせしました。
と、言っても待っている人なんているのか？　この小説……
自分で言って悲しくなるので、考えるな俺（笑

妹の結婚式や何やらで間が空いてしまいましたが、無事続きを更新。
ミレイは、私なりに可愛い娘（めがねっ娘万歳という感じでｗｗｗ）に設定したつもりなのですが、自分に自信が持てないみたいです。
（そういうようにキャラが動く）
両親と弟が亡くなったときに何も出来なかったのが影響してるのかな？

さて次回は、怖いお兄さんの再登場です。

ｏＰ０５：灼眼の鬼人と剣の神官

ミレイが、広場に足を踏み込むと村の青年達が倒れていた。ミレイは慌てて一番近くに倒れていた青年を抱き起こす。
「大丈夫ですか？何があったのですか？」
「ミ、ミレイか……　に、逃げろ……　早く」
青年は苦しそうに呻く。
「い、今、フェンリア様を呼んできます」
振り向き走り出そうとしてミレイは黒い影とぶつかり尻餅をつく。見上げると殺気の漲る灼眼があった。ジェニスの優しげな灼眼とは違う、何もかも焼き尽くしてしまうような灼眼が。
ミレイは声にならない悲鳴を上げ後退りするが、黒い影は右手に持った大きな槍でミレイのスカートを地面に縫いとめる。
「昼間、この村に赤毛で左腕を失った男が運びこまれた筈だ。どこに居る？」
地の底から響くような声がした。ミレイは声も出せずただ首を横に振る。
「こいつらのように、なりたいのか？」
黒い影は槍を一旦引き抜き、切っ先をミレイの喉元に当てた。肌が破れ血液が浮く。
「誰だか知らないけど、その娘を放してくれないかしら？」
後ろからの突然の声に男が振り返る。自由になったミレイは黒い影の横を駆け抜け、声の主に抱きついた。
「この村は我らガイア教の保護下にあります。ファン教の聖騎士様が傍若無人に振舞ってよい場所ではなくてよ。灼眼の鬼人殿」
「ふん。ここに赤毛、隻腕の男が逃げ込んだはずだ。引き渡してもらおう」
フェンリアは自分に抱きつき泣きじゃくるミレイの髪を撫でなが

ら答えた。
「それは無理ですわね。その者が犯罪者であるならガイアの法で裁きましょう。魔族という理由だけで追いかけていらしているのであれば教義により引き渡せません。ご存知でいらっしゃいましょう？」
灼眼の鬼人、ウッドは不敵な笑みを浮かべる。
「魔族の隠れ里、目撃者を消すのも簡単そうだ」
「ミレイ、離れていなさい」
フェンリアはミレイが自分から離れたのを確認するとソードブレイカーの柄に手をかける。
「勇敢な神官殿だな。私が灼眼の鬼人と知ってなお、戦いを挑むか。名を聞いておこう」
「フェンリア＝ヒルデガルド」
ウッドに表情に一瞬、驚きの表情が浮かぶ。
「『蒼い天使』の片翼に会えるとは思わなかった」
「そのふたつ名はルノアのものよ。最近では『蒼い聖女』と呼ばれているみたいだけど。私としては、もう一つのふたつ名の方がしっくりくるわ」
「『剣（つるぎ）の神官』か？」
「ええ」
周囲に少しずつ殺気が満ち始めた。

ｏｐ０５：灼眼の鬼人と剣の神官（後書き）

ここまで読んでいただいた方に感謝を。

怖いお兄さんの再登場です。ミレイちゃんになんてことをするんだ！　という感じですが。

外伝１のｏｐ０８のあとがきでふたつ名のことをちょっと書きましたがフェンリアのふたつ名が今回出ました。
ルノアは本編のほうで出ていまして、もう一つ出てきた『蒼い天使』というふたつ名は、見習い時代のルノアとフェンリアのふたつ名です。
ウッドが作中で『片翼』と称したのは、２人でひとつのふたつ名だからです。

ちなみにウッドの『灼眼（しゃくがん）の鬼人（きじん）』、元は『赤眼（せきがん）の鬼人』でした。灼眼になったのは、アニメ化（アニメどころか小説も読んでません……）もされているあの作品から取りました。灼眼のほうがカッコイイし（笑

では、次回も読んでいただけたらうれしく思います。

ｏＰ０６：ジェニスの決意とミレイとの約束

激しい剣戟の音が響き渡る。その音はジェニスの耳にも届いた。ジェニスは未だに思うとおりに動かない身体を引きずって家を外に出た。

村の中央の広場に対峙する人影が見えた。１人は幅の広く、峰にはのこぎりのような刃があるが入った剣、ソードブレイカーを構えている。もう１人は２．５ｍ程もある槍、そのシュルエットから判断すると兄のバハムートに間違いない。

おそらくフェンリア神官は自分の引渡しを拒否したのだろう。ガイア教の教義からすると、犯罪を犯したのでなければ、魔族をファン教に引き渡すわけがない。

ファン教の聖騎士の兄にすれば、魔族をいくら巻き添えにしてでも自分を殺しに来る。

「くっ、自分でケリをつけなければ」

ジェニスは、呟くように独白する。

「ジェニスさん」

名前を呼ばれ、はっと顔を上げるとミレイの姿があった。

「まだ動いては駄目です。戻りましょう」

そう言うミレイのスカートは裂け、喉元にも血のスジが残っている。

「ファン教の聖騎士がやったのですか？」

ミレイは何もいわず、ジェニスの脇を支えた。

「戻りましょう。今のあなたでは……　あとはフェンリア様にまかせて」

「答えてください！」

ジェニスはミレイを振りほどき、両肩を掴んだ。そして、真っ直ぐにミレイの深緑色の瞳を見つめる。

「答えてくれ」
「答えたら、そのままベッドに戻ってくれますか？」
ミレイの答えはジェニスの問いを肯定したも同然だ。ジェニスはミレイの肩を放すと、激しい戦闘を繰り広げる2人の下（もと）に足を向ける。
「行きます」
「嫌、行かないで、お願いです」
ミレイが後ろからジェニスに抱きついた。
「あのファン教の聖騎士の男は、私の異母兄です。ファン教の聖騎士ですから魔族を狩りだすのに容赦しません。それが血の繋がりのある者でも……　ここは僕が決着をつけなくてはいけない。それを人任せにしては一生後悔する。僕がこの手で全てを決める。わかってはもらえませんか？」
「……」
「お願いします」
ミレイは無言でジェニスの身体を支えた。そして広場の方に歩を進める。
「……ミレイさん……」
「怪我ぐらいなら許してあげます。死んだら駄目ですからね。立派でなくてもいい。どんなに無様でもいいです。生きぬいてください」
うつむいてジェニスの身体を支えるミレイの表情はジェニスからは見えない。だが、本当はジェニスを引き止めたいという想いは感じ取れた。
「……約束します。ありがとう、ミレイさん」

ｏＰ０６：ジェニスの決意とミレイとの約束（後書き）

ここ一週間ほど、仕事がデスマーチ状態で更新が遅れていますごめんなさい。
といっても読んでくれている人がいるのか疑問なんですけどね。
次回の更新は仕事しだいですね。予定では明日は早く帰れる予定ですけど……　予定は予定でしかないですから……

ｏＰ０７：隻腕と古の剣

大槍バハムートの穂先がフェンリアの左頬を掠め、切り裂かれたダークブラウンの髪が舞う。
突き出したバハムートで薙ぐウッドの動きを、ソードブレーカーで受け止めたフェンリアの頬から血が一筋流れた。
「剣（つるぎ）の神官の名に恥じぬ動きだな」
「嫌味にしか聞こえないわね」
「人が褒めているのだ。素直に喜べばよかろう」
フェンリアがバハムートを渾身の力で押し返す。
「灼眼（しゃくがん）の鬼人なんて、ふたつ名の割にはおしゃべりな男ね。男は寡黙なくらいがセクシーよ」
「その軽口どこまで続くか楽しみだ」
ウッドが腰を落としバハムートを肩の高さで構える。フェンリアも剣を構える。
「奥義！　双龍撃（そうりゅうげき）！」
「不可視の盾を！」
ウッドの大技の発動と同時に、フェンリアが魔法を展開する。次の瞬間、周囲を衝撃波が襲った。周囲を照らし出していたかがり火も掻（か）き消え、周囲に闇が落ちる。
「光よ。闇を退けよ」
ジェニスの声と共に、コモンと呼ばれるアイテムを利用した魔法の光が闇を照らし出す。
照らし出された闇の中から、肩で息をして剣を杖代わりに立つフェンリアと、涼しい顔をしたウッドの姿が浮かぶ。
奥義双龍撃と魔法の盾の激突、ウッドの双龍撃に軍配があがったようだ。
「ジェニス、覚悟は出来たのか」

ウッドがフェンリアから目を離さずにジェニスに問う。
「ウッド兄さん。僕は戦って生き残ることにしたんだ」
「ちょっと待ちなさい。そんな無茶を言わないで」
フェンリアが慌てて口を挟む。今のジェニスは普通に動くこともままならない状態なのだ。そしてその相手は、『灼眼の鬼人』。戦う前から結果は見えている。
「元々、我ら兄弟の問題。フェンリア殿には口出ししないでもらおうか」
「フェンリアさん、すみません。しかし、決着は自分でつけたいのです」
どうも、止めるのは不可能なようだ。フェンリアはため息を吐く。
「ミレイに、支えられている状態で言うセリフではないわよ」
フェンリアはウッドに向き直る。
「すこし、時間をもらえないかしら？　それとも、武器を持たない人間を嬲（なぶ）るのが趣味かしら？」
「5分待とう。それでよいな」
「充分よ。ミレイ、2人ほど連れて私の荷物から一番大きい剣を持ってきて」
ミレイが頷いて駆けていく。
「ほら、貴方はここに座って、まったく無茶するんだから……」
フェンリアはジェニスの身体に手をかざす。
「ガイアよ。戦いに赴く者に、癒しの力を」
フェンリアの手が輝き、癒しの魔法が発動する。
「どう？」
ジェニスは身体を動かしてみる。
「大分、動くようになりました。ありがとうございます」
「でも好調とも言えないでしょ。魔法も完璧な力じゃないから、その辺は我慢して」
「いえ、充分です」
ミレイ達が3人がかりで2．5mはある、古ぼけた大剣を運んで

きた。
「何ですか？　このごつい剣は？」
「古の神の剣。旅の途中にある遺跡で見つけたのだけど、私は剣に選ばれなかった。貴方ならどうかな。と思って……」
フェンリアは剣にまかれた布を解く。ジェニスは剣から立ち上る魔力に息を呑んだ。
「どうすればいいのですか？」
「持ってみればわかるわ」
ジェニスは恐る恐る剣の柄を握った。すると剣が淡い光を放つ。剣を持ち上げてみると軽々と持ち上がった。
「か、軽い」
「剣に認められたようね。銘は『天羽々斬』。私にできるのはここまで……　後はジェニス殿次第」
「フェンリアさん、充分です」
ジェニスは剣を握り直し立ち上がった。

ｏＰ０７：隻腕と古の剣（後書き）

読んでくれた方に感謝。
今日は早く帰れたので更新できました。
なんやかんやでこのお話も残り５部くらいです。毎日更新できたらあと５日分。がんばろう。

さて、本作で古の神の剣（いにしえつるぎ）と設定している『天羽々斬（あめのはばきり）』は、日本神話に登場する剣です。
須佐之男命（すさのおのみこと）　が八岐大蛇（やまたのおろち）　退治に使用した剣で、剣種としては十拳剣、柄の部分が十握ある剣です。
須佐之男命（すさのおのみこと）の前の所有者であるイザナギが子である火之迦具土神（ほのかぐつちのかみ）を斬殺した剣でもあります。
形状自体は実物も無く記録も無いため不明ですが、柄の長さから大剣ではなかろうかと推測できます。
名前の意味は、天（あめの）が尊称、羽々（はば）が大蛇を示し、『大蛇を斬った剣』という意味になります。

ｏＰ０８：戦う者と見守る者

「覚悟はできたか？」
刃渡りだけで自分の身の丈ほどの大剣『天羽々斬（あめのはばきり）』を担いだジェニスに、ウッドが不敵に笑う。
「兄さんと戦う覚悟はできたよ。そして生き抜く」
ジェニスは『天羽々斬（あめのはばきり）』を構えた。
「よくぞ言った。だが俺は魔族であるお前を殺す」
ウッドが大槍『バハムート』を構えた。
辺りをピリピリとした殺気が支配し、小さな虫の鳴き声すら聞こえない静寂が辺りを包む。

「フェンリア様」
消えてしまったかがり火の変わりに、魔法の明かりを灯しているフェンリアにミレイが不安げに話しかける。
「これはジェニス殿の望んだ事です。私に今できることはありません」
「もし、危なくなったら……」
ミレイの気持ちもわかるが、フェンリアは首を横に振った。
「ミレイ、これは一騎討ち。手を出す事はジェニス殿の誇りを傷つける」
「命よりも大事なの？　そんなものが？」
「場合によれば……」
「今がその時なのですか？」
頷くフェンリア。人はただ生きていればいいのではないとフェンリアは思う。何のために生き、何を成そうとし、どう生きるのか。時にはそれを見つけるために、命をもかける必要があるだろう。今、

ジェニスにとってその時だ。他の人間に出来ることは見守ることだけ。
「ジェニス殿が生き残れば、祝福を与えましょう。そうでない時は……」
「そんな、フェンリア様」
「だから、あなたは信じてあげて。ジェニス殿の言葉を、生き残ると言った彼を」
穏やかに話すフェンリアの言葉に、ミレイは頷いた。
……ジェニスさん、お願い生きて帰って。

「飛竜撃（ひりゅうげき）！」
ジェニスはウッドの強烈な一撃を剣の腹で受け止める。バハムートと天羽々斬（あめのはばきり）の魔力が反発して青白い火花が散る。
「そら、そら、反撃しないと俺は倒せないぞ」
「いつも無口な兄さんが、よく喋るな」
苦しさを隠すために、軽口を叩く。
「戦いはいいぞ。胸が高鳴らないか？血がたぎらないか？」
狂気にも似た表情を張り付かせてウッドが問う。
「俺は、兄さんほどイカレてない」
ジェニスが足を滑らせ、尻餅をつく。致命的なミス。
「運が無かったな。ジェニス」
尻餅をついたジェニスに、ウッドの一撃が襲い掛かる。
「炎の矢（ファイヤアロー）！」
少女の声と共にウッドに襲い掛かる炎の矢（ファイヤアロー）、ウッドはジェニスへの攻撃を止め、炎の矢をバハムートで貫く。炎の矢（ファイヤアロー）はバハムートの魔力により四散した。
「小娘がぁぁぁ！」
ウッドの怒りが、一騎打ちを邪魔した少女の方を向く。バハムー

トの切っ先が少女に狙いを定める。しかし、ババハムートが少女に届く寸前でキーンと澄んだ金属音が響いた。ババハムートの穂先を天羽々斬（あめのはばきり）が受け止めている。

「彼女には……　ミレイには手を出すなぁぁ！」

ジェニスが吼えた。そして、お互いに距離を取る。次の一撃で決まる。両者共に胸のうちで確信した。

数瞬の静寂……　そして。

「奥義！　双竜撃（そうりゅうげき）」

「奥義！　昇龍斬（しょうりゅうざん）」

血の華が咲いた……

ｏＰＯ８：戦う者と見守る者（後書き）

今回も最後までお付き合いありがとうございました。

剣と魔法の物語と銘打っている割には魔法の登場が少ない（回復魔法ばっかり）本シリーズなのですが、今回はポピュラーな魔法が登場です。

ファイヤーアローは、ロールプレイングゲームなどが好きな人なら聞いたことのある魔法の一つだと思います。

それにしても魔法攻撃すら物理的に防いでしまう魔槍（まそう）バハムート恐るべし。

ちなみに本世界でのバハムートは、ヨブ記に出てくる怪獣（バハムートは、ヘビモスをアラブ語読みした名称のため、本来は同一存在）や、イスラムの大魚型ではなく、『ファイナルファンタジー』などでおなじみのドラゴン型です。

そのためウッドの技名には『竜』の字が入っています。

ｏＰ０９：勝者と敗者

「ジェニスさん！」
うつぶせに倒れたジェニスに駆け寄ろうとするミレイの肩を、フェンリアが捕まえる。
「駄目よ。まだ終っていない」
ジェニスの腕が伸び、手から離れた大剣を再び握ると、天羽々斬（あめのはばきり）を杖のように使い立ち上がろうとする。その腹部から血が滴り落ちる。
一方、ウッドは片膝をつき大槍で身体を支えている。左肩から右わき腹にかけて切り裂かれた傷口から溢れ出した血が、足元に血溜りを作る。
ジェニス、ウッドどちらも普通なら致命傷となりかねない負傷を負っている。
それでも2人は立ち上がり向かい合うと、それぞれの武器を構える。
「もう、もうやめてください！」
つかまれた肩を振りほどき、ジェニスの元に駆け寄ろうとするミレイを、フェンリアが背後から抱きしめるようにして捕まえる。
「いやっ！　放して！　このままじゃ、死んじゃう！」
フェンリアは無言でミレイを捕まえる腕に力を込めた。
「ジェニス……」
「兄さん……」
ガシャッ、鋼と鋼が打ち合う金属音が響く。１合、２合、３合……　１９合、２０合、打ち合うごとに目に見えてスピードが落ちていく。そして、足を止めて打ち合う2人の足元が血に濡れる。
２７合、２８合……　２９合……　３０合、ウッドがバハムートを構えなおし、笑みを浮かべる。ジェニスもそれに答えるように、天羽々斬（あめのはばきり）を構えた。

だが、31合目はなかった。ふたつの武器は打ち合うことなく地面に突き刺さり、ジェニスとウッドはそのままうつ伏せに倒れた。
「ジェニスさん！」
フェンリアが腕の力を緩めると、ミレイがジェニスに駆け寄り抱き起こした。
「ジェニスさん！　ジェニスさん！」
ミレイの呼びかけに答えるように、ジェニスがゆっくりと目を開く。
「天使が見える……　ここは天国か？」
「そんな軽口が叩けるなら、大丈夫よ」
フェンリアが苦笑しながら、ジェニスに癒しの魔法をかける。
「フェンリア様」
「大丈夫、大丈夫、私が死なせないから、ただし1週間は絶対安静、面会謝絶。看護と監視はよろしくね」
ミレイの肩をポンと叩く。そしてウッドの方を見る。
「生きていて？　灼眼(しゃくがん)の鬼人(きじん)殿」
「……」
返事もしないウッドに対してため息を吐くと、フェンリアは癒しの魔法を唱える。
「いらん。自分でやる」
「自分で……　できないでしょう？　その傷じゃ」
フェンリアは魔法でウッドの傷口を塞いだ。
「とりあえず、あなたも1週間の絶対安静。ババムートは、あたしが預かっておくから」
「俺をどうするつもりだ？」
フェンリアは少し考えてから口を開いた。
「傷が治ったら聖地に戻りなさいな。ジェニス殿の事は忘れてね。その間にこの村をガイア教の正式な保護下に入れるから」
「俺が黙っていう事を聞くと？　……まあいい、今回は言う事を聞いてやる。ババムートは返せよ。お前さんのコレクションに加えら

れてはたまらん」
　フェンリアは笑みを浮かべただけで、そのことについては何も答えなかった。
「ところで、弟に負けた気分はどう？　だいぶ毒気を抜かれたようだけど」
「引き分けだ、俺はまだ負けていない」
　フェンリアがウッドの言葉に笑いながら首を振る。
「いいえ、灼眼の鬼人殿、貴方の負け。ジェニス殿は『生き残る』という目的を達したけれど、貴方は『ジェニス殿を殺す』という目的を達することが出来なかった。違っていて？」
　フェンリアの言葉を聞いてウッドは憮然（ぶぜん）とした表情をしたが、次の瞬間には晴れやかな微笑を浮かべると、フェンリアにだけ聞こえるような声で呟いた。
「不思議と悪くない気分だ」

ｏｐ０９：勝者と敗者（後書き）

ｏｐ０６ｏｐ０７よりｏｐ０８のアクセス数が２倍近く多いことに頭を悩ませている著者です。なぜ？（笑

勝負の行方は引き分けです。本編の３章にて最終的な決着が付くので２人ともここで殺すわけにはいかないもので（笑

戦う目的を達したという意味では、作中のフェンリアの言うとおり、ジェニス君の勝ちです。

外伝２も残りは後２話。明日あたり一気に更新したいところですが、どうなりますか。

ｏｐ１０：義務と本心と

薄暗い部屋の中で、ウッドは旅装を整える。
傷は完全には癒えてはいないが、戦場で鍛えた身体だ。王都までの旅にも充分耐えられる。
愛槍『バハムート』を手にとると、扉を開き外に出た。外は朝靄で視界が悪く隠れて村を出るには丁度いい。
村の出入り口まで来ると人影が見えた。ガイア教の神官服を着た、最近見慣れた女性だ。名をフェンリア＝ヒルデガルドという。
「挨拶も無いなんて、命の恩人に失礼ね」
「お前が勝手にやったことだ」
ウッドは、そっけなく答える。
「ジェニス殿には何も？」
「会うと約束を違えることになりそうだ。とりあえず王都に戻ってから、聖地アクレセレイの教団本部に戻る」
ウッドは冷笑を浮かべながら言った。
「本当にジェニスを殺すつもりだったの？」
フェンリアは問い掛けた。
「あの一騎討ち、俺が手を抜いたと思うのか？」
「全然、だから聞いているのよ」
「フッ、そうだな。俺には当主として、一族の名誉と誇りを守らねばならん義務がある。そのためなら弟の命でも、自分の命でも差し出す。だが、今回の事はお前、いや、フェンリア殿には感謝している」
フェンリアは目を見開いた。
「まさか、あなたからそんな言葉が聞けるとは思わなかったわ」
「ちゃかすな。ジェニスのヤツを殺そうとした事も本心だが、あいつが助かってホッとしている自分がいるのも本心だ。一応、あいつ

が赤ん坊の頃から一緒だったからな」
「私には貴族の世界はわからないわね。ジェニス殿を殺すのが嫌ならあんなに必死に追いかけなければ良かったのよ。谷に転落して死亡とでも報告しておけば問題ないじゃない」
フェンリアは肩を竦めて、あきれたように言う。
「フェンリア殿ならどうする？　なんらかの理由で妹のルノア殿が、ガイア教団から追われることになったら？」
「当然、ルノアを守るわ。教団？　ガイア様？　関係ない。私にとってはルノアの方が大事。世界を敵に回しても私はルノアを守る」
フェンリアは当然のように言い放つが、この場にガイア教の関係者が居合わせたら青くなったことだろう。
「はっきりと言うな。その真っ直ぐさ、うらやましくは思うが俺にはできん。ではさらばだ」
ウッドは、バハムートを抱えなおすと歩き出す。
「ちょっと待って、ジェニス殿に何か伝える事はない？」
いくばかりかの沈黙の後、ウッドは口を開いた。
「俺の前には二度と現れるな。今度、俺の前に現われたら殺す。それから、つよくなった。と」
「わかった、必ず伝えるわ。ウッド殿、今度会われるときまで御武運を」
「フッ、そうだな。なるべくなら味方同士でな」
ウッドは、振り返ることも無く村を出て行く。
そして、3年の月日の後、ウッドはジェニスとフェンリアの2人と戦場で再会する。ジェニスとは敵同士として、フェンリアとは味方として。

ｏｐ１０：義務と本心と（後書き）

残り後１話です。最終話まで更新して今日で完結させてしまいます。

そういえばそれぞれのキャラの本編での登場箇所ですが、ジェニス君はすでに登場済みで、ミレイちゃんが１章後編、フェンリアが２章中盤、ウッドが３章中盤です。

まだ２章３章っていつになるんだろうというレベルですけど。

op11：それぞれの道と新たな旅立ちと

「そろそろかな？」
フェンリアは、村の広場の隅に腰掛け建築途中の教会を眺めていた。そこでは、ガイア教団から派遣された神官達と一緒にやってきた大工達が忙しそうに働いている。
フェンリアがこの村にやってきてすでに3週間が経っている。疫病を患った村人達も全快したし、布教の方も引継ぎが済んでいる。大怪我を負ったジェニスもあの天羽々斬（あめのはばきり）の大剣を振れるほどまで回復している。
「暇……　ねぇ」
フェンリアはため息をつく。
「フェンリア様」
そんなフェンリアにミレイが声を掛ける。
「ん、ミレイちゃんか。ジェニス殿は一緒じゃないの？」
「いくらなんでも、いつも一緒じゃありませんよ」
「嘘っ」
今まで眠そうにしていたフェンリアの目が、驚きに見開かれる。
「フェンリア様～、いじめないで下さい」
フェンリアは少しだけ真面目な顔をする。
「それで、本当の所どうなの？」
「ジェニスさんの怪我が、もう少し回復したらふたりでガーベラに行こうかと思っています」
ガーベラ……　確か、その地で魔王を名乗る者が建国宣言をしたはずだ。大陸各地から虐げられた魔族が集まっていると聞いた。つい先月の事だ。
「魔王軍に参加するの？」
「ジェニスさんは、魔族でも安心して暮らせる世の中を作りたいそうです。私も、そのお手伝いをしたい……　本当に微力ですけどね」

フェンリアは寂しげに笑った。
「あなたたちが決めたことなら、私は何も言わない。それに、私は魔族ではないし、あなた達みたいに迫害された事も無いから」
「いいえ、フェンリア様は」
フェンリアはミレイの言葉を遮った。
「でも覚えておいて、戦うべき時とそうでない時を見極めて。戦わないと手に入らないものもあるけど、基本的に戦は憎しみしか生まない」
「フェンリア様……」
「自分の正義の為に、あちらこちらで剣を振るっている私が言えることではないけどね。おかげで『剣(つるぎ)の神官』というふたつ名まで付いちゃったわよ」
フェンリアの、寂しげな笑みを浮かべた横顔は美しかった。

3日後、旅装に身を包んだフェンリアの姿が村の入り口にあった。村人が全員見送りに来ていた。
中には、涙を流しながら引きとめようとした者までいる。
「皆さん、ありがとうございました」
見送りに来てくれた人々に、フェンリアは頭を下げた。
「いいえ、貴女がいらしてくれなければ、今頃村はどうなっておったことか」
村長は恐縮して答えた。この村にたどり着いたときの反応と比べるべくも無いが、極限状態であったとはいえ、わずか3週間の間にそれだけの信頼関係を築いていた。
「フェンリアさん、ありがとうございました」
そう言った後、ジェニスが握手を求めた。フェンリアは、ジェニスの右手を握り一言、「御武運を」と言って笑った。
昨夜、ジェニスはフェンリアに一緒にガーベラに行かないかと誘

ったのだが、教団から誰かが派遣されるだろうと、その誘いを断った。フェンリアは当初の予定通り辺境の地の村々を回るつもりだ。
「フェンリア様、これを持っていってください」
ミレイが包みを差し出す。
「お弁当？」
「はい。こんな事しかできないですけど」
「そんなことないわよ。ありがたくもらうわ。そうそう、ミレイ。ジェニス殿を放しちゃだめよ。でないとどこかに飛んでいっちゃうからね」
「フェ、フェンリア様、な、な、なにを、い、言っているんですか」
顔を真っ赤にして、どもるミレイ。その様子に周りから笑い声が起こる。
「それでは、またお会いしましょう。それまで皆様にガイア様のご加護がありますように」
別れの挨拶ではなく。再会の約束を残しフェンリアは足を踏み出す。村人たちはフェンリアの姿が見えなくなるまで手を振っていた。
剣の神官のふたつ名を持つ女性は、新たな旅路へと足を踏み出した。

ｏｐ１１：それぞれの道と新たな旅立ちと（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

外伝は第３話（タイトルは『剣の神官と純白の悪魔』）のプロットもできているのですが、こうも無反応だとどうしようかと思っていたりします。（外伝やめて、投稿作品数の少ないＳＦで新連載とか）

「はっきり言ってつまらないです」と言われれば、外伝の連載やめようかなと思わなくも無いのですが反応自体無いですし、かと言って「面白いです」という反応もないので今後の方針を決めかねています。

読者が反応に困る中途半端な作品を書く私が悪いのだろう。たぶん（笑

とりあえず、３話目は置いておいて、本編を更新していかないとダメかな。とりあえず３話目を更新するとしても年明けになると思います。

もし、お付き合いしていただけるのであれば、本編もよろしくお願いします。

では、またどこかの物語でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0770d/

聖魔戦記外伝２　隻腕の騎士

2010年10月8日15時47分発行